

第 I 部 地域の歴史と文化遺産の調査（京都府域）

# 京都大学総合博物館平成 28 年度特別展 「日本の表装—紙と絹の文化を支える」展 への企画協力

横内裕人・三輪眞嗣・井上真美  
北波正宏・藤垣朝一・張思捷

## I 概要

### はじめに

歴史学科では、標記の特別展に対して企画協力をおこなった。横内は古文書の修理・表装の歴史についての担当として展示委員会に参加し、企画の立ち上げ・運営に参画した。以下、企画の概要を述べ、企画に参加した院生による参加記録を掲げる。

展示委員会メンバー 岩崎奈緒子（京都大学総合博物館館長）、岡泰央（国宝修理装演師連盟理事）、中野慎之（京都府教育庁指導部文化財保護課技師）、橋本浩（国宝修理装演師連盟連盟員、京都府立大学文学部非常勤講師）、森道彦（京都文化博物館学芸員）、山本記子（国宝修理装演師連盟専務理事）、横内裕人（京都府立大学）

### 1. ワークショップ

本展覧会の関連企画として、2016年7月3日（日）京都大学総合資料館において修理技術者を対象としたワークショップを開催した。

絵画・文書の文化財を修理する仕事を出来るだけわかりやすく一般の方に伝えるため、修理技術者が、どのような考えに基づき、どのような方法によって修理をしようとしているのかを可視化することを目的とした。京都大学・京都文化博物館が所蔵する絵画・文書のうち、修理を必要とする作品を数点選定し、どのような修理が必要かを修理技術者に考えて貰い、その結果を討論するという形でおこなった。

参加者は、国宝修理装演師連盟の協力のもと、所属工房の若手修理技術者が修理設計をおこなった。またその他の技術者や、文化財学科をもつ大学に呼びかけて学生の参加を得て、ワークショップを見学する機会を設けた。府大歴史学科からは、井上真美（M2）・藤垣朝一（M2）・三輪眞嗣（D2）の3名が参加した。

当日は、技術者を絵画・書跡それぞれ3班に分け、午前中に作品観察・修理設計をしてもらった。その際、作品の使用される環境や所有者の意向を伝え、複数の案を考える課題を出した。

午後に絵画・書跡それぞれについて、設計内容を発表して貰い、相互討論をおこなった（絵画司会：中野、書跡司会：横内）。討論では、複数の設計案をめぐり技術者同士での熱心な討論がなされ、書跡・絵画で修理の理念・手法が異なること、現状維持修理がどうあるべきか、など修理の根幹に関わる論点にも議論が及んだ。参加した学生・院生にも学ぶ所が多かったと思われる。【後掲Ⅱの井上真美による参加記録参照のこと】

## 2. 特別展

### (1) 展示

本展示会は下記によりおこなわれた。

会期 2017年1月11日（水）-2017年2月12日（日）

主催：京都府、京都大学総合博物館、京都文化博物館、一般社団法人国宝修理装演師連盟

後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会

協力：京都府教育庁指導部文化財保護課、京都府立大学文学部歴史学科

文化庁平成28年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

横内は、展示作品の選定や渉外、また図録執筆に関わった。観客は3913人で予想以上の動員数を得た。

### (2) 展示解説

会期中の土日午前午後の2回、京都府立大学・京都大学の学生・院生による展示解説をおこなった。歴史学科からは、北波正弘（1回生、1/28,29）、藤垣朝一（M2、2/5,12）、三輪真嗣（D2、1/22,2/4,11）、張思捷（D3、1/14,15）が解説した。【後掲Ⅲの北波・藤垣・三輪・張による参加記録参照のこと】。



写真1 展示会場

### (3) 講演会

2017年2月4日（土）に「前近代における書跡・古文書修理の諸相」と題して講演をおこなった。内容は、平安時代から明治時代における紙文化財修理の諸例を挙げ、時代や史料群毎の修理理念・手法の特徴を述べ、あわせて「現状維持修理」の歴史について一般向けに話したものである。（聴講者114名）（横内）

## Ⅱ 「文化財修理の歴史と現在」のためのワークショップへの参加について

2016年7月3日（日）に京都大学総合博物館にて、「京都大学総合博物館・京都文化博物館合同展「装演（仮）京都会場「文化財修理の歴史と現在」のためのワークショップ」（以下、ワークショップ）が開催された。以下に、ワークショップの概要について記す。

## 参加者

横内裕人（京都府立大学教員）

三輪眞嗣（京都府立大学大学院文学研究科・博士後期課程）

井上真美・藤垣朝一（京都府立大学大学院文学研究科・博士前期課程）

## ワークショップ概要

ワークショップの内容は、絵画、古文書などの文化財を修理する装演師が、修理設計をするところを見学するものであった。参加していた装演師と参加者を、三人ずつくじ分けをして混合のグループを作り、午前中は、参加者は各グループの装演師が今回のワークショップにあたって用意されていた卷子装された書籍などの損傷状況、そしてそれを受けての修理方針を決めていく様子を見学した。修理方針については、予めどのような修理をしてほしいのか所蔵者の意向として希望が示されており、それに沿うような形でいかに最良な修理を施すかが指針とされていた。またその方針に関しては、そのメリットとデメリットを示すこととされていた。午後からはそれぞれのグループが提示した修理方針の報告、質疑応答が実施された。

文化財の修理という普段は目にするところを見学するという、非常に有意義な時間を過ごすことができた。モノをどのように見るのか、また修理と一言に言ってもその選択肢はいくつも存在し、いかに最良のものを選び取るのか、その様子を見ることができたことは実に貴重であった。また修理したとしても、それにはメリットばかりではなく、デメリットがあることもお話を聞くことができたことは、文化財の保存を考えていくにあたって参考になる点であったと感じた。（井上）



写真2 ワークショップ作品調査

## III 展示解説について

### 1. 展示解説参加記

今回、京都大学総合博物館の特別展、「日本の表装」の展示解説を引き受け、その時に学んだことを以下に述べていく。

まず、この展示の内容は、普段は一般に公開されることのないような文化財の傷み具合、そしてそれをどのように修復していくか、ということだと理解し、それを伝えていくことを解説の目的だと考えた。

解説の内容は、それぞれの展示物の具体的な情報、例えばどのように傷んでいるか、どのような修復方法なのか、どのような歴史を持っているかなどを話すことであった。そして、それ

を自分の言葉で最も伝わりやすいと思われる方法を考えて伝えていくように努めた。

自分は一回生で、まだ知識もほとんどなくほんとに解説などできるのか、また間違っただけを言わないかということが展示解説をおこなう前の深刻な不安であったので、一月の上旬にあった内覧会やほかの方の解説を聞きに行き、そこからたくさんのことを学ぶように心がけた。そして、自分で原稿を作り、一週間ほどその内容を読み返し、解説する内容を練っていった。その結果、解説している最中にフリーズしてしまうことは避けられたが、聞き手を引き付けられるような話し方ができたかは少し疑問であり、今後改善していきたい。

お客さんとのやりとりで一番困ったのは、自分が思いもしなかったようなことや、知識のまったくと及んでいないことへの質問である。こればかりは答えようがなかったりしたのだが、もう少し調べておけばよかったと後悔している。また、展示内容と関係するテレビ番組が直前に放送されていたようで、お客さんの中にはそれを見て興味を持たれた方もいらっしまった。そのようなことから、日常生活の中にも広く知識を求めていく必要があることが分かった。

以上を受けて、今後に向けて広い分野にわたる知識の習得と、人に伝わりやすい話し方を身に付けていくようにしたいと思う。

最後に、今回の展示解説を通して、自分の弱さや強さを発見することができ、少し成長できた気がします。このような機会に巡り合えたことを感謝します。 (北波)

## 2. 「日本の表装」展に参加して

2月5日、京都大学総合博物館の「日本の表装」展にて、展示解説をおこなった。解説当日はあいにくの雨模様であったが、20名ほどの参加者を得ることができた。参加者の中には教員の方や、文化財修理技師の方もおられた。

本展示は、「モノは、傷む」「だから、直す」「歴史をたどる」の三つのセクションに分かれており、解説もこのストーリーに沿っておこなった。

「モノは、傷む」では、書籍と絵画の両方で損傷がどのような要因で進んでいくのかについて解説した。使われることを前提とした文書と、見られることを前提とした絵画では、損傷の様相が異なることなどを中心に説明した。

「だから、直す」では現在の文化財修理の方法や、修理で注意すべき点などについて解説した。修理することによって消えてしまう情報があること、文化財の状態・使用目的によって修理の方法を選択するなど、修理には考慮すべきことが多くあることに注目が集まった。

「歴史をたどる」では、過去にいかなる修理がおこなわれたのかについて、様々な事例をもとに解説した。特に『勸修寺聖教』の表装からは、江戸時代の僧賢賀の典籍類に対する思想を読み取ることができることなど、表装や修理も歴史を考える材料になることを説明した。

参加者からは、掛け軸の構造について、文化財の損傷を食い止めるにはどうしたらよいか、修理技術者になるにはどのような道があるかなどの質問が出された。

本展示は表装・修理をテーマとしており、通常の文書・絵画の展示とは異なって、解説に工夫が必要な面もあった。解説を通じて、現在われわれが目にする文化財の裏側に広がる、とても豊かで奥の深い世界を伝えることができたと感じている。 (藤垣)



### 3. 「日本の表装—紙と絹の文化を支える」展における展示解説について

京都大学総合博物館で開催された「日本の表装—紙と絹の文化を支える」展は、現在の修理やモノが伝来する過程で施された修理の様相を伝えることをテーマにした展示である。並べられたモノやパネルを通して、従来の修理方法や科学的技術を取り込んだ現代の修理など、文化財を守り伝える営みが明らかにされる。修理前の傷んだ姿をあえて見せ、修理の痕跡を示すために掛軸を裏返しにして展示するなど、他展ではなかなか見ることのない仕掛けも特徴である。

そうした文化財修理の歴史の一端を伝えるべく、京都府立大学の学部生・大学院生も展示解説員のメンバーとして参加している。筆者は2017年1月22日（日）・2月4日（土）・2月11日（土）の3日間・計5回、展示解説をおこなった。本展示は書跡・絵画の二本柱から成り立っているが、絵画も適宜触れつつ、書跡を中心に解説を進めていった。解説時間は平均して31分ほどであった。

解説をする際には、関連する展示箇所が複数あるので、参加者の移動を極力少なくするため動線には特に注意した。また、「本紙」「裏打ち」など、展示を通して頻出する用語は解説の初段階でそれらがどのようなものかを説明した。「漉き嵌め」や「相剥ぎ」、「折れ伏せ」などの専門用語も、出てくる毎に平易な言葉で説明するよう心掛けたほか、調査や実習などでの経験談や本展示の感想も交え、参加者により具体的なイメージを持ってもらうようにした。

解説中・解説後には多くの質問が寄せられた。解説中は、解説者からの問いかけに対する応答のほか、勸修寺符案はなぜ卷子に改装されたのか、絵が描かれた絹も本紙というのか、という声もあがった。解説後に寄せられた質問では、装潢師の世界に関するものが多く、表具師とはどう違うのか、いつごろから現代のような形になったのか、などであり、装潢師になるのはどのような人かという質問もあった。修理の技法では「漉き嵌め」についての質問が多く、大量の水を使ってもよいのか、本紙の上には流し込んだ繊維は残らないのか、といった質問が寄せられた。この展示を通して、文化財修理の世界に興味を持ってもらえたのではないかと感じられた。とはいえ、うまく答えられなかった質問もあり、解説者同士でどのような質問があったかなど、情報の共有を密におこなうことが求められる。（三輪）

### 4. 「日本の表装」展の展示解説を担当して

#### ・解説の内容

展示品の特質（書跡と絵画の共通点と相違点の説明を含む）、傷みの状況、修理の方法（事前調査の必要性・修理方法の種類およびその強みと弱み・傷みの具合に即する修理方法の選択および注意点など）、修理の歴史と修理技術の発展について解説した。

#### ・解説の目的

修理の実例に即して書跡・絵画修理の歴史・必要性・作業の困難さを来場の観客にできるだけわかりやすく伝えることを目的とした。

#### ・特に気をつけたこと

紙の折れがお品の傷みに発展するケースが多い。長い人類の歴史の中で、紙が書跡・絵画を載せる最適な媒体として選ばれる理由はその柔軟さ、丈夫さにある。折り畳めることは紙の強

みであるはずだが、ここでは破損を招く主要な原因となるのは興味深いことである。私は古本を買った経験があり、そのページをめくる時に装丁と繊維の劣化に感心したことがあるので、破損の原因を観客の方々にわかりやすく伝えるために、説明の中にこのような私的な体験を少し交えてみた。

・観客とのやりとり等、気づいたこと

観客の方々はとても熱心である。中に専門家の方がおり、私の解説ミスを直してくれたり、気づかなかった点を指摘してくれたりしたので、私としては大変よい勉強の機会であった。また修理事業の発展と技術の伝承に強く関心を持っている観客もあり、会話の中でその情熱と愛がしみじみ伝わってくる。私が解説を担当した時に来場した観客の数は決して多くはなかったが、皆真剣な態度で展示を観覧していた。そのおかげで解説終了後、自分も大いなる達成感を味わえるようになった。

・今後に向けて

今回の展示テーマは書跡・絵画の修理技術史である。内容は基本的に江戸時代から現代までの修理業界を中心としたものであり、自分が専攻する日本中世史と一定の距離がある。それでも院政期、鎌倉期の勸修寺聖教・東大寺文書が何点か出展されたので、親近感のある展示であった。そこで考えるのは文献学と文献修理の接点である。歴史学の立場に立つ人は、修理前の情報を破壊させない原則に基づいて、完璧な修理を求める傾向がややあるが、修理業者たちには資金と人員の制限があるので、すべてのお品に善を尽くして修理するのは無理である。例えば漉き嵌め技術の応用に関して人によっては評価が極端に分かれている。この意味で修理の効率化と情報保存の完璧化を両立させることが難しい。両者の間の溝を出来るだけ狭めるためには、歴史学者と修理業者の間の連携の深化が求められるであろう。 (張)



写真3 展示解説